

ネイサン・サモンの反フレーゲ的信念文分析の 批判的検討

上 田 知 夫

序論

本稿ではネイサン・サモンが『フレーゲのパズル』(Salmon 1986)で提示した素朴理論を検討し、素朴理論が抱える問題を明らかにすることを目指す。しかし、それに先立ってまず信念文の分析が解くべき問題を提示し、さらにその問題についての異なる 2 つの解決法を提示することで、サモンの議論の位置づけを明らかにしよう。

英語で信念文は“Lois Lane believes that Superman flies”のように表されるが、その従属節である‘that’-節に現れる語の指示対象は、通常の文脈におけるその語の指示対象とは異なるように思われる⁽¹⁾。というのも、“Superman flies”のような主張文では指示対象を同じくする共指示的な単称名同士を置き換えても全体の真理値が変わらないが、信念文の従属節の中では共指示的な単称名同士を置き換えることができるとは限らないように思われるからである。すなわち、

(1) Lois Lane believes that Superman flies.

という文が真だからと言って、“Superman”という名前を共指示的な“Clark Kent”という名前で置き換えた

(2) Lois Lane believes that Clark Kent flies.

という文が真だとは限らないように思われる。なぜなら、ロイスが“Superman flies”という文に同意を与えるときに、必ずしも“Clark Kent flies”という文に同意するとは限らないからである。文への同意と信念の間には密接な関係がある。クリプキによれば、ロイスが提示された文に同意するならば、われわれはロイスにその文で表現される内容を持つ信念を帰属させることができる（引用符除去則より。Cf. Kripke 1979, 248-9)⁽²⁾。したがって、ロイスが“Superman flies”という文に同意を与えるならば、われわれは（1）のように言うことができる。しかし、もしロイスが“Clark Kent flies”に同意しないなら、われわれはむしろ

(3) Lois Lane does not believe that Clark Kent flies.

のように言うだろう。われわれが（3）のように主張するならば、（2）は主張しないだろう。それゆえ、（1）と（2）は真理値を異にするように思われる。

（1）と（2）の真理値の違いを、信念文の従属節に現れる語の指示対象の違いによって説明したのがフレーゲである。フレーゲは、「意義と意味について」で、語が信念文の従属節（ドイツ語の‘dass’-副文）に現れるとその語は通常の文の中で指示するような意味を指示せず、間接的な意味を指示すると主張する（Frege 1892, 37-38）。フレーゲによれば、通常の文の中で同じ意義（Sinn）を表現する語同士が信念文の従属節で置き換えられうるのであり、それゆえ語の間接的な意味とはそれが通常の文の中に現れるときに表現する意義である。ここからフレーゲはドイツ語の‘dass’-副文は真理値を指示せず、通常の文が表現する意義である思想を指示すると考える。

このフレーゲの主張に対して、（1）と（2）の真理値は同じであるという重要な反論がなされている。それは信念文の従属節に現れる固有名の指示対象に

着目した反論である。クリプキは、「信念のパズル」の中で、信念文の従属節で固有名がその意義を指示するという見解に反対する (Kripke 1979, sec. 1)。クリプキは固有名の意味論的な機能がその指示対象を指示することに尽きると考える (Kripke 1979, 248)。このクリプキの議論を具体的に理論化するのが新ラッセル主義の論者である。新ラッセル主義の理論家たちは様々な理論を提示しているが、共通するのはフレーゲの主張に反対し、上で挙げた (1) と (2) の例文が共に真であると主張することである (McKay and Nelson 2006, sec. 4)⁽³⁾。

そういった新ラッセル主義の理論の 1 つが本稿で採り上げるサモンの「素朴理論 (Naive Theory)」である。サモンは (1), (2) が共に真であると主張する。サモンは文が表すラッセル命題とその構成要素をそれぞれ文や各表現の「情報値」と呼び、次のように定義する。固有名や代名詞のような単純な単称名の情報値はその指示対象であり、 n -項述語の情報値は n -項属性 (性質であるか、 n -項関係) であり、文によって符号化される情報値はそれらからなる順序対——つまりラッセル命題——である⁽⁴⁾。例えば、「ソクラテスは賢い」という文の情報値は〈ソクラテス, 賢さ〉という単称命題である。そして、サモンは信念文の従属節はこの情報値を指示すると主張する。

このとき、サモンの素朴理論はフレーゲの理論のように (3) を真とするのではなくて、(2) を真と考えるのだから、上で見たロイスの反応の違いについてフレーゲと異なる説明を与える必要がある。サモンは実際に後述の BEL 分析を用いることで、(3) を主張するようなわれわれの信念報告の実践が誤っているという主張に説明を与える。われわれは第 1 章で、サモンの BEL 分析に注目しながら素朴理論の主張を確認する。

このサモンの素朴理論が興味深いのは BEL 分析で「相貌 (guise)」と呼ばれる概念を用いることである。この概念をこれまで多くの論者がフレーゲの意義の概念と混同して解釈してきた。その結果、サモンの議論はフレーゲの議論の亜種になってしまう。そうだとすると、サモンがフレーゲを批判し、フレーゲの理論の代案となるライバル理論を提案しているとはみなせなくなってしまう

う。第2章ではこれらの先行研究をサモンによる反論を通して検討する。そして、本稿ではサモンの相貌がフレーゲの意義とは異なること、それゆえサモンの素朴理論はフレーゲのライバル理論であることを示したいと思う。

その上で、本稿が最も中心的に議論するのはサモンの素朴理論が抱える問題点についてである。第3章で、信念間の推論に関する直観とサモンの素朴理論の主張とを合わせると不整合な結果が生じるということ、及びサモンの素朴理論が単称名の情報値についてなした修正が問題を含むことを議論する。

1 サモンの素朴理論

この第1章ではサモンの素朴理論がどのようにわれわれの信念報告の直観を説明しつつ新ラッセル主義の主張を維持するのかを検討する。そのために、まずサモンが提示するフレーゲのパズルを取り出し、サモンがパズルをどのように棄却するのかをみる (1.1)。続いて、われわれの信念報告についての事実を説明するためにサモンが持ち出す BEL 分析を提示し (1.2)、最後に実際にわれわれの信念報告についての事実がどのように説明されるのかを検討する (1.3)。

1.1 フレーゲのパズル

サモンの素朴理論では、固有名や代名詞の情報値はその指示対象である。したがって、

- (4) Superman flies.
- (5) Clark Kent flies.

という2つの文によって符号化されるラッセル命題は同一であり、この2つの文を意味論的に区別できない。そのため、素朴理論は、これから検討する、フレーゲのパズルに直面するように思われる (1.1.1)。

しかし、サモンはフレーゲのパズルを検討して、素朴理論を決定的に棄却する議論ではないと結論づける。なぜなら、以下で明らかにするように、パズルを構成する前提の1つを棄却することができるとサモンは考えるからである(1.1.2)。

1.1.1 一般化されたフレーゲのパズル

「フレーゲのパズル」という名前は、フレーゲが「意義と意味について」の冒頭で提示した同一性言明の認識価値の問題に由来する (Frege 1892, 25)。このフレーゲのパズルを一般的なかたちで表すと、次のような核心を取り出すことができる。フレーゲのパズルの核心とは、ある述語 Φ について、 a と b が共指示的で単純な単称名であるにもかかわらず、 $\Phi(a)$ と $\Phi(b)$ とが異なる情報を符号化するということである (Salmon 1986, 79-80)。

サモンが取り出したこのパズルの核心を構成するためには、素朴理論の主張に加えて、合成原理と共情報的文の置換図式、そしてわれわれの信念報告についての事実という3つの前提が必要である。まずこの3つの前提を提示しよう。

第1の前提は情報値の合成原理である (Salmon 1986, 55)。合成原理は情報値の同一性に関わる。例えば、「ゆうずつはゆうずつである」と「ゆうずつはあかぼしである」という2つの文は、3項からなる3つ組という同一の構造を持ち、金星、金星、同一性という同一の3つの構成要素からなり、それが<同一性、金星、金星>という同じ順番、すなわち、同じ構成の仕方であるので、同一の情報値を符号化していると言える⁽⁵⁾。

さらに、一般化されたフレーゲのパズルに関する情報の概念は、通常の日常的な知識や信念の概念と緊密に結びついているとサモンは考える。というのも、 A が情報 p に肯定的態度をとっているときに、「 A はその情報 p を信じている」と言って良いというのが、「信じる」という語の正しい使用を支配する規準であると考えからである (Salmon 1986, 83)。文が符号化する情報と信念内容は同一視できる。すなわち、サモンの考えでは、ある情報に対して肯定

的態度 (favorable attitude) をとることはその情報を信じていることの必要十分条件になっている (Salmon 1986, 80).

信念と情報の間のこの関係が示唆する共情報的な文の置換図式とは、情報の同一性について成り立つ次のような図式である。S と S' が日本語や英語などの主張文であるとき、

もし S という情報 = S' という情報であるならば、ある人が S と信じているのは、その人が S' と信じているとき、そのときに限る (Salmon 1986, 80).

この図式は、共情報的な文を信念文の従属節で置換することを許す。これが第2の前提である。

最後に、サモンは第3の前提として信念報告のわれわれの実践に関する、次のような事実を挙げる。

適切な状況のもとでは、「ロイス・レーンはクラーク・ケントがスーパーマンだと気づいていない (知らない、信じていない)」や、「ゆうずつがあかぼしだと知られていなかった時代がある」のようにわれわれが言うということを否定することはできない (Salmon 1986, 81).

そして、問題は同一性言明だけに限られないとサモンは考えていたのであるから、第3の前提としては

(6) Lois Lane believes that Superman flies, but she does not believe that Clark Kent flies.

とわれわれが主張するという事実を考えても良いだろう⁽⁶⁾.

素朴理論の主張と以上の３つの前提を組み合わせるとパズルが構成される。もし上で挙げた３つの前提がすべて正しいのであれば、このパズルは文が符号化する情報を情報値という概念で取り出そうとする素朴理論への反証となるように思われる。まず、われわれの手にしている前提から、(6) のようにわれわれは主張する。そのとき、共情報的文の置換図式の対偶より、(4) “Superman flies” の符号化する情報と (5) “Clark Kent flies” の符号化する情報が異なることになる。合成原理より、Superman と Clark Kent は異なる情報の構成要素である。素朴理論では文の符号化する情報とは情報値のことなので、以上の前提のもとでは、“Superman” と “Clark Kent” という名前の情報値が異なることになる。しかし、素朴理論の主張では、“Superman” と “Clark Kent” という名前は同じ情報値を持つから、矛盾が生じる。最初に立てた３つの前提が正しいとすれば、素朴理論の主張が棄却される。

1.1.2 パズルへの反論

サモンは、このパズルを構成する前提の内、われわれの信念報告についての事実を否定する。そうすることで、このパズルが素朴理論に対する決定的な反証ではないとサモンは主張する。つまり、(1) “Lois Lane believes that Superman flies” が真であるならば、われわれが (3) “Lois Lane does not believe that Clark Kent flies” のように言うにも関わらず、実際には (2) “Lois Lane believes that Clark Kent flies” も真であるとサモンは主張するのである。

では、われわれが (3) のように言うとき、われわれは何か真でないことを曖昧な仕方、あるいは、比喩的な仕方ですべてしようとしているのだろうか。サモンはそうではないことを認める。われわれが (3) のように言うとき、われわれは文字通りに（しかし誤って）このことを主張しようとしているのだ (Salmon 1986, 81)。

なぜわれわれは誤った主張をなすのか。サモンは、われわれが文 (3) を主張するような場合には、意味論的に符号化される情報と語用論的に伝達される

情報の区別がなされておらず、そのせいで、信念を帰属させる際の暗黙的な規準が守られていないと考える (Salmon 1986, 84-85)。以下で、このサモンの主張を説明しよう。

まず、文が意味論的に符号化する情報とは、サモンの素朴理論では情報値、すなわちラッセル命題のことである。

一方で、文が意味論的に符号化する情報の他に、情報には非言語的な行為が伝達する情報があるとサモンは考える。例えば、スミスが鼻をすすると、その行為は彼が風邪をひいているという情報を与える。スミスの鼻すすりは言語的なジェスチャーではないので、この行為が与える情報は意味論的に符号化された情報ではない。同様に、あらゆる観察可能な出来事は鋭い観察者に情報を伝達する。したがって、発話も行為の1つとして観察者に情報を伝達する。ということは、文を発話することで、人は文が意味論的に符号化する情報と、文の発話が語用論的に伝達する情報の2種類を伝えることができる。一般的には、文が意味論的に符号化する情報が発話によって伝達される。しかし、発話は文が意味論的に符号化する情報より多くの情報を伝達することがある。

以上の分類をふまえて、共情報的文の置換図式は文が意味論的に符号化する情報に関わるとサモンは考える。なぜなら、 A がラッセル命題 p に肯定的態度をとっているとき、「 A は p を信じている」と言って良いということが、「信じる」という語の日常的に正しい使用を支配する暗黙的規準だからである。

このように考えるとき、もし (1) が真ならば、(2) も真であることになる。もし日常言語の話者が (2) を主張することを拒否するときには、「信じる」という語の使用に対する規準を誤適用しているとサモンは考える (Salmon 1986, 83-84)⁽⁷⁾。

もしわれわれの信念報告についての事実が系統的に誤っているならば、フレーゲのパズルは生じない。なぜなら (6) “Lois Lane believes that Superman flies, but she does not believe that Clark Kent flies” で表される信念報告が偽だからである。しかし、ではなぜ日常言語の使用が系統的に誤ってしまうのか。サモ

ンは、素朴理論と結びついた信念についての語用論的な分析を用いて、その理由を明らかにしようとする。

1.2 BEL 分析

サモンの素朴理論では、信念とは文の情報値に対する肯定的態度である。この信念分析に基づくと、(1) “Lois Lane believes that Superman flies” が真であるときに、(2) “Lois Lane believes that Clark Kent flies” も真であることになる。しかし、われわれはこのような場合に、(2) のように言うとは限らない。では、なぜわれわれはこのように誤ってしまうことがあるのだろうか。サモンが与える回答は、ラッセル命題の再認の失敗を説明する語用論的分析に訴えることで与えられる。この 1.2 節ではサモンの回答を検討しよう。サモンの説明を理解する鍵となるのが「相貌」と呼ばれる概念である。まず、ラッセル命題に相貌という概念がどのようにして導入されるのかを検討し (1.2.1)、その後、その相貌概念を用いた BEL 分析を検討する (1.2.2)。

1.2.1 ラッセル命題と相貌

われわれは、固有名や代名詞の指示対象を再認し損なうことがありうる。例えば、ロイス・レーンはスーパーマンとクラーク・ケントの見えが違うために、この両者が同一であることを再認できない。このように指示対象の再認には、対象が主体にどのように現れているかが重要な役割を果たす。あるいは、あかばしとゆうずつの例であれば、どのような時間帯にどこを見るのかといった主体が置かれる状況がそれぞれの指示対象の再認に大きな意味を持つ。こういった指示対象の見え方や主体の置かれた状況のように、主体が対象を再認するための手段、すなわちサモンが「面識の様態 (mode of acquaintance)」と呼ぶものが対象の相貌である。

ところで、サモンは、信念文の従属節がラッセル命題を指示すると考えた。さらに、信念文の従属節に固有名や代名詞が含まれるときには、その従属節が

指示するラッセル命題は単称命題であって、そこには従属節で使用される固有名や代名詞の指示対象が含まれる。

ここからラッセル命題に相貌があると結論できる。というのも、単称命題の構成要素である固有名の指示対象を再認するときに相貌が重要な役割を果たすので、固有名の指示対象の相貌をその部分に含むようなラッセル命題全体の相貌がラッセル命題全体の再認のために重要な役割を果たすからである (Salmon 1986, 108-9)。したがって、ある人がある対象にある相貌のもとでなじんでいる (familiar) と言えるのと同様に、ラッセル命題についてもある人がそのラッセル命題にある相貌のもとでなじんでいると言える⁽⁸⁾。

このようにしてラッセル命題に相貌が導入されれば、その相貌が異なることを根拠にして、ラッセル命題の再認に失敗するというに意味が与えられる。つまり、ラッセル命題の再認の失敗とは、同じ情報を新しい情報として捉えたり、異なる情報として捉えることである (Salmon 1986, 109)。

サモンのこの立場の独自性はフレーゲやラッセルの議論についてのサモンの理解と比較するとよく分かるだろう。なぜなら、フレーゲやラッセルの立場では、サモンの情報概念にあたるものを把握したならばそれを再認し損なうことなどないと考えられるからである。というのも、サモンの理解によれば、フレーゲやラッセルの理論では再認の誤りがないものが情報にあたるものの構成要素と考えられるからだ。例えば、フレーゲの理論では、思想が信念文の従属節の指示対象であり、思想は各語の意義から構成されている。そして、各語の意義は概念的であり、サモンの理解では、各語の意義とは各人がそれぞれの語をどう理解しているかであるので、意義は把握したなら再認の誤りなどない。それゆえ、文の意義である思想にはそもそも相貌の違いなどないとサモンは主張する。また、ラッセルの理論ではラッセル命題の構成要素が概念と「直接見知る」ものであるセンス・データであり、概念にもセンス・データにも、再認の誤りはそもそもないとサモンは主張する。つまり、ラッセルの理論にも相貌はない (Salmon 1986, 107-8)。

1.2.2 BEL 関係

サモンはラッセル命題に相貌という概念を導入することによって、信念について以下に述べるような BEL 分析を与える。この分析は信念の帰属と相貌との間に関係をつける。

次のような関係「 $BEL(A, p, x)$ 」を考えよう。この BEL 関係の第 1 項は信念主体、第 2 項がラッセル命題、そして第 3 項がラッセル命題の相貌を表している。BEL 関係は信念主体 A がラッセル命題 p をある相貌 x のもとで捉えたときに、ラッセル命題 p に肯定的態度をとっていることを表す関係である (Salmon 1986, 111)。この BEL 関係は以下の 3 つの性質を持つ。

まず第 1 に、素朴理論が与えてきた信念文の意味についてのこれまでの説明は、BEL 分析で BEL 関係の第 3 項が存在汎化されたものとして捉えられる。つまり、ある相貌のもとで信念主体 A がラッセル命題 p に肯定的態度をとっていれば、 A は p を信じていると言える。

第 2 に、必ずしもすべての相貌のもとで BEL 関係が成り立っていなかったとしても、少なくとも 1 つの相貌のもとでラッセル命題 p に肯定的態度をとるならば、信念主体 A がその p を信じていると言いうる。

そして、第 3 に、サモンはこの BEL 関係が 1 つの相貌のもとで成り立たないことを「主体が信念を保留する (a subject withholds belief)」のように表現し、(積極的に) 信じないことと区別する。なぜなら、この場合にも第 2 の規定より、他の相貌のもとで主体がラッセル命題に肯定的な態度をとっているのであれば、その主体はそのラッセル命題を信じていると言えることになるからである。

サモンは第 1 と第 2 の規定において、信じるということを、主体が少なくとも 1 つの相貌のもとでラッセル命題に肯定的態度をとることと分析した。ということは、サモンにとって、信念主体 A がラッセル命題 p を (積極的に) 信じないことは、あらゆる相貌のもとで BEL 関係が成り立たないことであると分析できよう。

ここで注意しておくべきことは、この BEL 関係は信念文の真理条件では言及されない、とサモンが主張することである (Salmon 1990, 237-8)。サモンの考えでは、信念文が真となるのは信念主体がその信念文の従属節の情報値に肯定的態度をとるときである。それゆえ、ラッセル命題の相貌は信念文の意味論的な分析には関係ない。この論点には後で戻ってくる (2.2.1)。

1.3 われわれはなぜ誤った信念報告をするのか

サモンは、信念についての BEL 分析を用いて、なぜわれわれが系統的に誤った信念報告をするのかを説明しようとする。

このことを理解するのに重要なことは、サモンは BEL 分析の中で信念の保留という概念を導入することによって、提示した文への不同意の反応とラッセル命題を（積極的に）信じていないこととの間の関係を切り離したことである。たしかに、あかぼしがゆうずつであることを知らない古代の天文学者が「ゆうずつはゆうずつだ」という文に同意を与えながら、「ゆうずつはあかぼしだ」という文に同意を与えないという事例は、彼がゆうずつがあかぼしだと信じていないことの証拠であるように思われる。しかし、文の提示や発話が伝達するものをラッセル命題の 1 つの相貌と考えるならば、サモンの BEL 分析はこのような事例を信念の保留として捉えて、信じていないこととは捉えない。逆に、その天文学者が「ゆうずつはあかぼしである」という文を提示されたときに信念を保留していたとしても、この文が符号化するラッセル命題と同じラッセル命題を符号化している「ゆうずつはゆうずつである」という文に同意を与えることは、両方の文が共に符号化するラッセル命題に肯定的な態度をとっていることの証拠になる。それゆえ、彼はゆうずつがあかぼしであるとも信じていることになる (Salmon 1986, 115)。

しかし、われわれは、ときとして、そのラッセル命題がどのような文として提示されたときに信念主体が同意を与えるのか、つまり、信念主体がどの相貌のもとでラッセル命題を捉えたときに、そのラッセル命題に肯定的態度をとっ

ているかということを直接に問題にしたくなることがある。この場合に有効なのは、BEL 分析で用いた BEL 関係のような動詞を用いることである。ところが、このような動詞は日常言語には存在しないし、この BEL 関係を日常言語で無理矢理表そうとすると非常に冗長になるだろう。そこで、われわれは通常の「信じる」という動詞を用いながら、以下に述べるように、BEL 関係を表現するような用語法を生み出したのだとサモンは考える (Salmon 1986, 115-8)。

たしかに、通常の場合、英語の信念文で ‘that’-節が伝達するのはもちろん信じられているラッセル命題のみであるが、場合によっては ‘that’-節を信念主体がラッセル命題を見知ようになった相貌を伝達するために用いることができるとサモンは考える。つまり、例えば

(7) The astronomer believes that Phosphorus is Hesperus.

という信念文は、その天文学者に

(8) Phosphorus is Hesperus.

という文を提示したときに、その天文学者が同意を与えるという BEL 関係を表すと考えるのである。このように考えるとき、信念文を BEL 関係の第 3 項を伝達するものとして利用することができるように思われる。サモンの考えでは、この信念文の ‘that’-節は、天文学者がゆうずつはゆうずつであることを表すラッセル命題になじんでいることを、‘that’-節の中でそのなじんでいる文に言及することによって表している。そして、このようにして伝達される情報は語用論的な情報である (Salmon 1986, 117-8)。

このように考えるとき、天文学者は文 (8) に同意を与えないというわれわれの想定のもとでは、文 (7) の発話は偽なる語用論的情報を伝達することになるだろう。というのも、この信念文の ‘that’-節が伝達している語用論的情報

とは文 (8) というかたちで提示されたラッセル命題に天文学者が肯定的な態度を示すということだからだ。それゆえ、話者は文 (7) を否定することになるだろう。

結局、サモンの考えでは、われわれが系統的に誤って信念文を用いるのは、われわれが意味論的な情報と語用論的情報を混同し、信念文を用いて信念主体がどのラッセル命題に肯定的態度をとっているかではなく、どのような相貌のもとで信念主体がラッセル命題になじんでいるのかを表そうとするからである。

2 素朴理論はフレーゲ主義の分析か

第1章で提示したサモンの素朴理論を検討するために、本章ではこれまで先行研究が彼の素朴理論、とりわけ BEL 分析をどのように理解してきたかを批判的に検討することにしよう。以下で提示するように、これまで多くの論者が BEL 関係の第3項である相貌をフレーゲの意義、あるいはその機能の1つである対象の与えられ方と同一視してきた。もし BEL 分析がフレーゲ主義的な分析になっているとすると、BEL 分析を導入したサモンの素朴理論はフレーゲのライバル理論とは言えないことになる (2.1)。しかし、このことはサモンにとっては好ましくない。したがって、多くの論者の見解はサモンへの反論として理解できることになる。この議論へのサモンの再反論を検討することを通じて、われわれはサモンの素朴理論をフレーゲのライバル理論として理解する (2.2)。

2.1 BEL 分析の理解

2.1.1 相貌と意義

サモンの BEL 分析がフレーゲの信念文分析と同一視できるという見解は、サモンの挙げる相貌の特徴が意義の特徴と同一視できることを根拠にしている。以下で示すように、相貌と意義が共通に持つように思われる特徴とは、命題の捉え方という特徴である。

BEL 関係の第 3 項である命題の相貌は、命題の与えられ方という特徴を持つ。1.2.2 で定義した $BEL(A, p, x)$ という関係は、主体 A が命題 p に相貌 x のもとで肯定的態度をとっているという関係であった。この相貌 x は、その相貌のもとで主体 A が命題 p になじんでいるような、そういう理解の様態である (Salmon 1986, 108)。そして、この命題の相貌は、その部分として命題に含まれる対象の相貌を含む。それがサモンの言う対象の捉え方 (the way of taking objects) である (Salmon 1990, 236-8)。

一方で、フレーゲが指摘する固有名の意義の機能の 1 つ (バージの意義⁹) に、対象の与えられる様態 (Art des Gegebenseins des Bezeichneten; mode of presentation of the thing designated) としての意義があった (Frege 1892, 26)。さらに、日常言語においては個人が「アリストテレス」のような固有名に結びつけている意義は様々でありうるのだから (Frege 1892, Fn. 2 [27])、この対象の与えられる様態としての意義は個人ごとに異なりうる。それゆえ、固有名の意義はある主体への対象の与えられる様態として捉えることができるように思える (Cf. Frege 1918a, 65)。

このように比較すると、相貌とフレーゲの意義は個人による対象の捉え方という同じ特徴を共有しているように思われる。

実際に、多くの論者がサモンの相貌概念と意義概念の間に類似性を見いだす。例えば、シファーはラッセル命題の相貌を「フレーゲ命題」、すなわち思想と同一視できると考え、BEL 分析を再定式化する (Schiffer 2003, 38-39)。シファーは “Lois Lane believes that Superman flies but not that Clark Kent does” という文は必然的に偽なことを述べているが、語用論的には真なことを含意していると考え。そして、そこで含意されている内容がフレーゲの意義だとシファーは分析する。中にはさらに進んで、サモンの BEL 分析をフレーゲ流の意味論的な信念分析だと考える論者もある。これから検討する野本 (1997, 330-8) やフォーブス (Forbes 1987, 457) といった論者は、サモンの BEL 分析が語用論的な分析ではなくて、信念文の真理条件を明らかにする意味論的な分析であ

と考える。

野本はサモンの BEL 分析を「準フレーゲ的」な分析と呼んでいる。野本 (1997, 334) は、フレーゲの意義の機能の内、バージの意義¹を意義の話し手なりの対象の同定法のようなものとして「改釈し直」す (強調原文)⁽¹⁰⁾。そうすることで、意義と相貌の概念規定の平行関係がより明確になる。その上で、野本はサモンの BEL 分析を次のようにまとめる。

サモンは一方で、ソームズ同様 (A2) 「意味論的には信念は信念主体と命題との二項関係であるという立場」を採用しつつも、BEL という三項関係が隠されていると認める分析を与えようとする。しかも存在量化されている第三項は単に語用論的ではなく、信念報告の真偽に関係する意味論的要因と見なされている (野本 1997, 335; □ 内は引用者)。

この BEL 関係の第 3 項に当てはまるのが、先ほど野本によって「改釈し直」された意義であると野本は考える。ここから、BEL 関係全体が意味論的な関係だと野本が考えていること、そしてその第 3 項に入る相貌はフレーゲの意義を緩めたものであると野本が考えていることが分かる⁽¹¹⁾。

2.1.2 サモンはフレーゲ主義——フォーブスの批判 1

フォーブスは『フレーゲのパズル』に対する書評を著し (Forbes 1987)、その中で素朴理論に対する反論を 3 つ挙げる。その内、本稿で扱う 2 つの反論は次のようなディレンマのかたちをしている⁽¹²⁾。ディレンマの 1 つの角は、サモンの素朴理論が信念主体に矛盾した信念を帰属させるような不合理な主張をすることである。ところが、この不合理性を回避するために新たな分析装置を導入すると、その理論はもはや新ラッセル主義の理論でなく、サモンが批判するフレーゲ主義の理論になってしまう。これがディレンマの第 2 の角である。

ここではまず、ディレンマの第 2 の角を検討する。この論点は、フォーブス

によれば、他の反論よりも「より重要な」反論に位置づけられる (Forbes 1987, 457).

まず、フォーブスも BEL 分析で用いる相貌概念とフレーゲの意義概念が同じであることを指摘する。なぜなら、相貌の特徴には命題の把握の仕方 (manner of grasping) があり、これがバージの意義₁と同一だとフォーブスは考えるからである。

サモンの説明では、命題の把握の仕方というものもあり、その命題の把握の仕方はその成分として対象の把握の仕方と性質の把握の仕方を持っている。これらはまさに新フレーゲ主義者が命題の構成要素であると考ええるような意義である (Forbes 1987, 457)⁽¹³⁾。

相貌が意義と同一視できるとすると、サモンの定義する BEL 関係をフレーゲ主義的に書き換えることができるように思われる。実際、フォーブスは、“ $BEL(A, p, x)$ ” という関係を “ $B(A, x) \ \& \ p = Ref(x)$ ” と書き換えることができると主張する。この書き換えで、“ B ” が表しているのがフレーゲ流の信念の関係であり、“ Ref ” は意義を取って指示対象を返すような関数であるとフォーブスは考える。したがって、“ $B(A, x) \ \& \ p = Ref(x)$ ” は、「主体 A が文の意義である思想 x を信じ、かつ、命題 p は思想 x で与えられる指示対象である」のように読めることになる。

命題の把握の仕方は信念文の従属節の指示対象ではないという反論がサモンからあがるかもしれないとフォーブスは認める。しかし、それはサモンが指示対象と呼ぶものの中に命題の把握の仕方が入らないというだけであるとフォーブスは主張する (Forbes 1987, 457)。フォーブスはその主張の根拠を述べないが、われわれの日常的な信念報告が BEL 関係が成立しているかどうかを報告しているとするならば、日常的にわれわれが用いる信念文の真理条件に関わるのは従属節の符号化する命題の把握の仕方であるように思われる。もしそうで

あれば、実際にわれわれが用いている信念文の従属節ではフレーゲ的な意義が指示されていることになるだろう。

フォーブスの見立てでは、BEL 分析を通常的信念文の分析に付け加えることは、もはやサモンの立場をラッセル主義の立場から引き離してしまい、サモンのライバル理論であるフレーゲ主義の立場へと連れて行ってしまふ。

2.2 サモンはフレーゲ主義者ではない

このような論者のサモン理解は正しいだろうか。つまり、サモンはもはや新ラッセル主義者ではなく、素朴理論はフレーゲのライバル理論ではないのだろうか。

しかし、サモンはこの見解に反対する。以下においてサモンの再反論を検討することで、サモンの信念文分析とフレーゲの信念文分析は重要な点において異なることを示したい。とりわけ、相貌と意義という 2 つの概念は異なる概念であり、両者を同一視できないというサモンの主張に注目しよう。

2.2.1 サモンによる反論

サモンはフォーブスの書評に対する反論を著している (Salmon 1990, sec. 5)。その反論の中で、サモンは、固有名や代名詞のような単純な単称名が信念文の従属節で何を指示するかという点について、フレーゲと自分は一致していないと主張する。サモンの考えでは、単純な単称名の機能は指示対象を指示することに尽きるからである。

その上で、サモンは、自分の BEL 分析で登場する相貌概念がフレーゲの意義概念とは異なる概念であると主張する。たしかに、サモンの BEL 分析がフレーゲの意義の理論に回収されると考える論者が多い理由が、自分の相貌概念、つまり対象の捉え方という概念にあるとサモンも考える。しかし、意義と相貌は信念文の分析で果たす役割が異なるだけではなく、そもそも両概念はまったく異なる概念だとサモンは主張する。

まず、サモンは、相貌と意義では信念文の分析で果たす役割が異なると主張する。なぜなら、サモンの考えでは対象の捉え方は信念内容とは関係ないからである。サモンの与える信念文の意味論的分析では、信念が信念主体とラッセル命題の間の2項関係として捉えられるので、対象の捉え方は信念文の真理条件の中では言及されない。対象の捉え方、つまり相貌が関係するのは、提示された文とその文に対する信念主体による同意・不同意の反応の間の関係に関わる語用論的分析の中においてのみである。そのBEL分析でも、信念を持つことを分析するときには、個々の相貌は言及されず、相貌の存在汎化が現れるだけである (Salmon 1990, 238)。

一方で、サモンが述べるように、フレーゲの理論では固有名の意義、つまり対象の与えられる様態が、すべての命題的態度帰属を表す文の真理条件で、明示的に指示される (Salmon 1990, 238)。

さらに、サモンは相貌概念が意義概念とそもそも異なる出自を持つ概念であると主張する。なぜなら、意義概念は意味論に関わるのに対して、相貌概念は心理学に関わるからである。サモンは相貌について次のように述べる。

手短かに言えば、わたしの対象の捉え方は、通常の文の意味論的内容とは一切関係ないし、その結果、その対象の捉え方は命題的〔態度〕帰属の意味論とも、命題的態度の帰属とさえも、一切関係ないのである。対象の捉え方は、哲学的心理学から生じたものであって、哲学的意味論から生じたのではない (Salmon 1990, 238)。

この箇所では、サモンは相貌概念は哲学的な心理学から生じた概念であると指摘し、それゆえ相貌概念と意義概念は異なると主張している。このサモンの指摘は重要である。なぜなら、ここから多くのサモン理解がフレーゲが意義概念で捉えたものと表象概念で捉えたものを混同していると言えるからである。以下でフレーゲとサモンの議論を比較しつつ明らかにしよう。

再び、命題の相貌に含まれる対象の相貌はどのようなものであったかを考えてみよう。なぜなら、ラッセル命題の構成要素の内、対象だけが再認の誤りがあるようなものだからである。フレーゲやラッセルの理論で再認の誤りが言えないことをサモンが述べた際に、概念的なものには再認の誤りがないことがその1つの根拠になっていた。そして、サモンは述語の情報値は概念的な n -項属性だと考えるのだから (Salmon 1990, 235)、述語の情報値には再認の誤りはないことになる。同様の議論は真理関数的結合子などにも成り立つので、結局サモンの理論でラッセル命題の構成要素の内、再認の誤りがあるのは対象だけである。したがって、ラッセル命題の再認の誤りは、そこに含まれる対象の再認の誤りによってのみ引き起こされる。

サモンの言うことを理解するために、われわれが事例としている、(4) “Superman flies” と (5) “Clark Kent flies” という1組の文のそれぞれをロイス・レーンに提示する場合を考えてみよう。スーパーマンは黄色地に赤い「S」の字が胸に描かれた青いコスチュームに身を包み、赤いマントを付けた姿としてロイスに現れており、この相貌のもとでロイスはスーパーマンを再認している。そして、このスーパーマンの姿が黒いスーツに眼鏡姿のクラーク・ケントと異なるので、ロイス・レーンは対象の再認に失敗する。それゆえ、ロイスは文(4)が符号化するラッセル命題を、文(5)が符号化するラッセル命題として再認できない。

相貌の差異の要因には、今指摘したような客観的な見えの違いと、主体がどのように対象を知覚するかに依存する主観的な見えの違いがある (Salmon 1986, 105-6)。しかし、客観的な見えの違いであれ、主観的な見えの違いであれ、多くの場合、相貌の差異に関係する見えとは主体が持つ対象の知覚像のことである。この点がフレーゲの意義と比較する上で重要である。

一方のフレーゲの理論では知覚像の違いは意義の違いではなく、表象の違いとして捉えられる。意義の差異には知覚像の差異は関係ない。なぜなら、フレーゲは対象の知覚像を表象に含めて、意義と区別するからである。フレーゲは、

例えば「ブケファロス」という語が生み出す表象が人によって必ず異なるにも関わらず、この語の意義は理想的には共通であると指摘する (Frege 1892, 29; 1897, 151). 語の意義の差異はその語がどのように規定されるかという違いのみによってもたらされる。

以上から分かるのは、相貌の違いは知覚像の違いとして捉えられることが多いのに対して、意義の違いは知覚像の違いによっては捉えられないということであり、この点が相貌と意義の大きな違いである。

相貌と意義の差異は、サモンの BEL 分析が何を説明するための分析であったかを思い出せばより明確にすることができる。サモンの BEL 分析は、ある命題に対して本当は肯定的態度をとっているにも関わらず、その命題を符号化する文を提示すると信念主体はその文に同意を与えず、そのせいで、「信じる」という語の使用を支配する規準をわれわれが誤適用するという場合を説明するために導入された分析である。この規準の誤適用を説明するためには、文が提示されたときに、信念主体がラッセル命題をどのように捉えているかを明らかにしなくてはならない。相貌はそれを明らかにするための概念である。ということは、相貌は必ずある信念主体と結びついていることになる。相貌は人に結びついているので、フレーゲの表象概念と親近性がある。表象は必ず担い手が必要としており、ある人の持つ表象は他者と共有不可能だからである。それに対して、意義は人に対して語や文がどう現れているかには関わらない。意義は人が把握している文の内容であると言えることはできるかもしれないが、それは把握している人に属しているのではない (Frege 1892, 29; 1918a, 69; 1918b, 151などを参照)。意義によっては、ある文が信念主体にどのような表象を生み出すのかということが一切明らかにならない。

以上の検討から、サモンの相貌はフレーゲの表象と親近性を持つことが示された。それゆえ、サモンの相貌概念をフレーゲの意義概念と同一視することはできない。それゆえ、多くの論者の解釈と違って、サモンの素朴理論が用いる BEL 分析はフレーゲ主義の分析と言うことはできない。したがって、サモン

の素朴理論はフレーゲの分析に対するライバル理論と呼ぶことができよう。

3 素朴理論の欠点

サモンの素朴理論をフレーゲの分析のライバル理論として捉えたとき、素朴理論が信念文の分析としてフレーゲの分析よりも適切な理論となっているかどうかを検討する必要がある。本章では、まず 2.1.2 で扱ったフォーブスのディレンマの第 1 の角と、それに対するサモンの再反論を検討することを通じて、矛盾という概念と信念の間の関係をサモンがどう捉えていたかを明確化する (3.1)。そして、その結果明らかになったサモンの主張をわれわれの信念についての直観と合わせて考えると不整合な帰結が生じることを示唆する (3.2)。さらに、数詞の情報値を考察することで、サモンが単称名の情報値と合成原理を調停するための修正が必ずしもうまくいっていないことを示す (3.3)。

3.1 矛盾した信念の帰属——フォーブスの批判 2

2.1.2 で、フォーブスが提示するディレンマの第 2 の角を検討したが、ここでは第 1 の角を提示することから考察を始めよう。

われわれの信念報告の誤りを説明するために導入した BEL 分析に従うと、次のような推論ができる。ロイス・レーンが「スーパーマンは空を飛ぶ」という文に同意するとき、ロイスはスーパーマンは空を飛ぶと信じている。このとき、「スーパーマン」という名前の情報値と「クラーク・ケント」という名前の情報値は同一であるので、素朴理論の前提よりロイスはクラーク・ケントが空を飛ぶと信じている。だがここで、さらにロイスが「クラーク・ケントは空を飛ばない」という文に対しても同意を与えると、ロイスはクラークが空を飛ばないとも信じていることになる。ということは、ロイスはクラーク・ケントが空を飛ぶと信じ、クラーク・ケントは空を飛ばないと信じることになる。

フォーブスは、このときサモンの素朴理論が信念主体であるロイスに矛盾した信念を帰属させていることになるのではないかと批判する (Forbes 1987, 456–

7)⁽¹⁴⁾．これがフォーブスの指摘するディレンマの第1の角である．

この批判に対してサモンは直接反論していない．しかし、彼は『フレーゲのパズル』の付録Aで既にこの問題に対する答えを与えているように思われる (Salmon 1986, Appendix A)．というのも、フォーブスの批判はクリプキが「信念のパズル」の中で検討したパズルと同じかたちをしているからである (Kripke 1979)⁽¹⁵⁾．クリプキの検討するパズルは、信念保有者が文に同意を与えるならばその文の内容についての信念を保有しているという引用符除去則と、名前が固定指示子であることを前提すると、同じ指示対象について矛盾する信念を帰属させることになるというかたちをしている．

サモンの考えでは、クリプキのパズルはそもそもパズルになっていない．したがって、サモンは同型のフォーブスの批判も批判になっていないと主張することになるだろう．なぜクリプキのパズルがパズルになっていないかというと、サモンにとって矛盾や論理的整合性といった概念はラッセル命題に適用されるのではなくて、文に適用されるからである．サモンの主張を確認しよう．例えば、「ゆうずつは惑星であるが、ゆうずつは惑星ではない」と「ゆうずつは惑星であるが、あかぼしは惑星ではない」の2つの文は同じラッセル命題を符号化している．それにもかかわらず、「ゆうずつは惑星だが、ゆうずつは惑星ではない」という文は論理的に矛盾しているが、「ゆうずつは惑星だが、あかぼしは惑星ではない」という文が誤っていることは経験的にしか分からず、矛盾していないという違いがある．それゆえ、ラッセル命題に矛盾概念は適用できない．ラッセル命題について矛盾という概念が当てはまらなるとすると、矛盾した信念という概念もカテゴリー・ミステイクを犯していることになる．なぜなら、サモンの素朴理論では、信念とは、信念主体がラッセル命題に対して肯定的態度をとっていることだからである．信念について言えるのはせいぜい信念内容が派生的な意味で矛盾しているということだけであるとサモンは考える．

3.2 BEL 分析と信念間の推論

以上のサモンの主張はたしかに矛盾する信念の帰属という問題を回避しているように見える。しかし、信念文の従属節が指示するのは文でなくて命題であるというサモンの主張、及び矛盾は文にのみ当てはまるというサモンの主張は、以下に検討するようなわれわれの信念についての直観と両立不可能であるように思われる。

われわれはある人に信念を帰属させるとき、その帰属された信念から論理的推論を行い、その帰結となる信念をその人に帰属させることができるように思われる。もちろん論理的な推論の帰結が無制限に帰属させられるかどうかは議論の余地がある。しかし、このような信念の帰属がまったく不可能だと言うことはできないだろう。例えば、ロイスはイルカかサメがほ乳類だと信じ、さらにロイスはサメがほ乳類ではないと信じているとき、われわれはロイスにイルカがほ乳類だという信念を帰属することができるだろう。信念の帰属を分析する理論は、これらの推論ができるという直観を説明する必要があるように思われる⁽¹⁶⁾。

しかし、この信念間の推論についての直観は、サモンの主張と両立可能ではない。サモンは、先に確認したように、矛盾や論理的整合性のような論理的属性が文に適用され、命題には適用されないと主張していた。また、サモンは信念内容は文でなくて命題だとも主張している。この2つの主張から、サモンは信念内容には矛盾や論理的整合性という属性は適用できないと考えていることになる。信念間の推論関係を説明するには矛盾や論理的整合性の概念は欠かせないので、サモンの主張を維持すると、信念間の推論は説明できなくなるだろう。

したがって、信念間の推論についてわれわれの直観を説明するためには、矛盾や論理的整合性が命題に適用できないという主張を否定する必要がある。さらに、そのためには、単純な単称名の情報値がその指示対象であるという素朴理論の主張を訂正する必要がある。素朴理論で矛盾や論理的整合性が文に適用

され、命題に適用されないのは、われわれがロイスにクラーク・ケントが空を飛ぶという信念と、クラーク・ケントが空を飛ばないという信念を帰属させることを素朴理論が許すからである。このような信念帰属は単純な単称名の情報値がその指示対象であると考えことから帰結する。

以上の考察から、サモンの素朴理論は帰属された信念間の論理的な推論を説明する理論としては適切ではないように思われる⁽¹⁷⁾。

3.3 数詞の情報値

サモンの素朴理論は算術で用いられる等式や不等式のラッセル命題を考慮すると、さらなる問題に直面するように思われる。それは「5」や「7」といった数詞の情報値について考察することで生じる。

ここで数詞の情報値について検討するのはなぜか。それはサモンの素朴理論をフレーゲの議論と比較する上で重要だからである。この重要性は、フレーゲは自らの意義概念を等式や不等式のような算術命題の考察に用いるために生み出したという事実から理解される。フレーゲは算術命題を論理学の定理として証明するという研究プログラムを遂行していた。この「論理主義」と呼ばれる研究プログラムの進展の中で、フレーゲは意義と意味を区別するという着想を得た。フレーゲは意義と意味の区別を、彼の「論理的な見解の徹底的な進展の1つ」に挙げる (Frege 1893, x)。このことから意義とは、本来、日常言語の文ではなく算術命題を分析するために用いられる概念であると言えよう。したがって、意義概念を検討するには算術命題の意義について検討することが不可欠である。以上のことをふまえると、日常言語の文についてだけでなく、算術命題について意義や情報値を検討し、サモンとフレーゲを比較することは、両者の議論の差異をより明確に特徴づけることを可能にするだろう。

サモンは単称名を構文論的に単純なものと複合的なものに分割する。単純な単称名とは固有名や代名詞のようなものであり、複合的なものは確定記述などである。サモンによれば、単称名は単純であるかどうかによってその情報値を

異にする。なぜなら、サモンは情報値の合成原理を認めるからである⁽¹⁸⁾。単純な単称名の情報値はその指示対象であり、複合的な単称名の情報値はその指示対象ではなくて複合的な存在者である。サモンはこの区別に基づいて、2種類の単称名は置き換えることができないことを主張する。したがって、サモンによれば、自然言語では、大抵の場合、語を完全に定義することはできない(Salmon 1986, 138)。

この区別は固有名と確定記述を区別し、固有名に意義がないことの論拠の1つとなるが、数詞の情報値について考察すると上記の区別が成功しておらず、素朴理論は単称名の情報値についての合成原理をうまく取り込めていないことが分かる。例えば、「 $5+7=12$ 」のような等式に現れる「5」や「7」といった数詞は、サモンの分類に従えば単純な単称名である。なぜなら、「5」や「7」という数詞の記号自身は、確定記述句が持つような構造を持たないからである。それゆえ、その「5」や「7」の情報値は5や7といった対象そのものになる。一方で、5や7といった数は「0」の指示対象に後続者関数を加えたものとして定義できるので、そのように考えると「5」や「7」は複合的な単称名によって完全に定義できる。サモンは数詞以外の単称名について、単純な単称名を複合的な単称名で定義することはできないと考えていたことを確認したが、ここで考察している数詞の事例はサモンの考えに対する反例になる。

したがって、数詞の情報値については、サモンの主張と合成原理との対立が生じてしまう。以上の考察から、単称名の情報値に合成原理を認めるときに、単称名が単純か複合的かという区別に訴えることで問題を解消しようとするサモンの手法は適切でないように思われる。なぜなら、数詞は単純な単称名だが、複合的な単称名を用いて完全に定義できるからである。以上の問題は、少なくとも数詞についてフレーゲ的な意義を導入することで解消できるように思われる。数詞にその定義を反映した意義を導入すると、数詞が複合的に表されるかどうかに関わらず、その規定のされ方によって情報値が決まるのからである。すなわち、数詞は複合的な仕方では表されようが、単純な仕方では表現されようが、

1つの定義を共有していると考えられる。そのような場合に、その数詞の定義を反映した意義を情報値とするならば、その数詞がどのように表現されたとしても情報値は変わらない。

4 結論

ここまでの議論から明らかになったことをまとめてみよう。

まず、われわれはサモンの素朴理論が新ラッセル主義の理論として、(3) “Lois Lane does not believe that Clark Kent flies” のようなわれわれの信念報告についての実践をどのように分析するかを検討した。サモンはわれわれの通常の信念報告は系統的な仕方では誤っていると考え、その誤りを分析するために命題に相貌という概念を導入し、BEL分析によって(3)のような信念報告を信念の保留として説明し、(1) “Lois Lane believes that Superman flies” と(2) “Lois Lane believes that Clark Kent flies” が共に真であるという主張を維持した。

この相貌概念を多くの先行研究はフレーゲの意義と重ねて理解してきた。それゆえ、サモンの素朴理論はもはや新ラッセル主義の理論ではなくて、フレーゲ主義の理論になっており、もはやフレーゲのライバル理論とは呼べないのではないかという疑いが生じた。本稿は、相貌と意義の違いを明確にすることによって、これらの先行研究のサモン理解を批判した。

その上で、サモンの素朴理論が持つ問題点を2点示すことで、フレーゲとサモンの議論の差異をより明確にすることを試みた。

まず、サモンの素朴理論の主張は信念間の論理的な推論というわれわれの直観と両立不可能であることが示唆された。そして、この不整合性を解消するためには素朴理論を否定する必要があるように思われる。

最後に、数詞の情報値について考察し、その結果、単称名について合成原理を認めるためのサモンの手法に瑕疵があることが示された。そして、少なくとも数詞の情報値としてフレーゲ的な意義を要請する必要があることが示唆され

た。このことはフレーゲ的な意義を命題の構成要素とすることを拒否する素朴理論に対する批判となる。

註

- (1) 本稿では、スーパーマンやクラーク・ケント、ロイス・レーンといった名前で指示される対象が実在すると想定する。
- (2) クリプキは引用符除去則を定式化する際に、信念主体が正常な英語の使用者であって、「熟慮の上で誠実に」文に同意するということを条件に加えている (Cf. Kripke 1979, 248-9)。さらに、クリプキはより強い双条件法の定式化も認める (Kripke 1979, 249)。
- (3) 「新ラッセル主義」という立場を、McKay and Nelson (2006, sec. 4) は2つに分類する。その内、本稿で注目する新ラッセル主義の立場は、彼らの分類する“naive-Russellian”のことである。
- (4) 本来はさらに、 n -項文結合子と n -項量子などの情報値についての規定がある (Salmon 1986, 17-18, Theses I-IX 参照)。

ただし、単称名のうちで確定記述句については、サモンは単純な単称名とは違ってその指示対象が情報値ではないと考える。というのも、確定記述句については上に述べた素朴理論の規定と合成原理の間に不整合性が生じるからである。

素朴理論は単称名の情報値は指示対象につきと考えるので、『『国家』篇の著者』のような確定記述の情報値は指示対象である。一方で、サモンは情報値について合成性が成り立つと考えているので、確定記述の情報値はその構成要素となる表現の情報値から構成されると考えられる。これは両立不可能である。というのも、指示対象はプラトンという単純な存在者であるのに対して、構成された情報値は複合的だからである (Salmon 1986, 20; また 1990, 234 を参照)。

さらにサモンは命題を永久化するために発話の時点をも命題に埋め込むという改変も加える (Salmon 1986, 24-30)。

この2つの改変の結果をサモンは「〔二重に〕修正された素朴理論 ([doubly modified naive theory])」と呼ぶ。以下、本稿で単に「素朴理論」と言ったときにはこの修正された素朴理論を指す。

- (5) 本稿では「あかぼし」を“Phosphorus”の、「ゆうずつ」を“Hesperus”の訳語として用いる。野尻 (1973, 209) の解説を参照。
- (6) 以下のパズルの構成では、この例文を用いる。
- (7) このように説明すれば、確かにわれわれの日常的な用法が誤りとなりパズルは構成されない。しかし、信念文の分析はわれわれの日常的な言語実践を説明するよう

な理論になっている必要があるのではなからうか、という問題が残るように思われる。サモンはこの問題に対して、たしかに言語の日常的用法が正しい用法のための信頼できるガイドであるという点を認める。しかし、一方で、日常的な用法はガイドに過ぎないのであって、日常的な用法が正しくないということはあるうたとサモンは答える (Salmon 1986, 84)。

- (8) サモンの考えでは、主体が単称命題を把握するときの再認の仕方、すなわち理解の様態 (mode of apprehension) は複合的であり、ラッセル命題の構成要素をその人が再認する手段がそこに含まれている (Salmon 1986, 108)。
- (9) バージは意義の機能を 3 つに分類する (Burge 1977, 356)。それは、理解の相関者としての意義₁、指示対象を決定するものとしての意義₂、間接的文脈の意味としての意義₃である。飯田 (1987, § 3.2.4 [111-24]) の分類も参照。
- (10) ここからサモンの分析は「準フレーゲ的」と呼ばれる (野本 1997, 339 も参照)。
- (11) 野本は、このように BEL 分析と意義の理論を重ねながら、このことがサモンの素朴理論に対する反論になっているとは考えない。
- (12) 本稿で扱わないもう 1 つの反論は、サモンによるフレーゲ批判に対する再反論になっている。
- (13) 「新フレーゲ主義」というのは、フォーブスが自分で展開したフレーゲ主義の理論である。この理論は、例えば、1990 年の彼の論文で展開されている (Forbes 1990)。
- (14) ここではフォーブスが用いた事例ではなくて、クラーク・ケントとスーパーマンとロイス・レーンを用いた事例に改変した。またタシエクも同様の批判を挙げている。彼が指摘する新ラッセル主義者の第 1 の困難を参照 (Taschek 1992, 779-80)。
- (15) クリプキは 3 つのパズルを検討しているが、それら 3 つのパズルは同型である。この 3 つのパズルの関係については、副島 (1994, sec. 1; 101) のまとめも参照。
- (16) たとえロイスがこのような信念の帰属を拒む場合にも、われわれはこのような信念帰属ができるかもしれない。そして、もしロイスがわれわれの信念帰属を拒む場合には、ロイスは最初に帰属された前提となる信念を拒否しなくてはならないように思われる。しかし、1 人称的な信念の保有と 3 人称的な信念帰属の間の関係は本稿で検討する範囲を超える。
- (17) サモンはこの直観についてとりわけ次のように反論することができるように思われるが、本稿ではこの反論についての決定的な再反論を用意できていない。
反論：命題にはそもそも論理的推論ができない。われわれが信念間の推論を行うように見るときには、命題を符号化している文の間で推論しているのであって、命題間で推論している訳ではない。
しかし、この考え方が信念内容が言語中立的な命題であるというサモンの主張とが整合的であるのかは、慎重に検討しなくてはならない。

(18) 注4で言及した素朴理論の修正点を参照。

参考文献

- Burge, Tyler. 1977. “Belief *De Re*.” *The Journal of Philosophy*, 74 (6): 338–62.
- Forbes, Greame. 1987. Reiview of *Frege’s Puzzle* by Nathan Salmon. *The Philosophical Review*, 96 (3): 455–8.
- 1990. “The Indispensability of Sinn.” *The Philosophical Review*, 99 (4): 535–63.
- Frege, Gottlob. 1892. “Über Sinn und Bedeutung.” *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik* NF, 100: 25–50. Wieder in Frege (1990, 143–62). 邦訳：「意義と意味について」土屋俊（訳）。フレーゲ（1999, 71–102）所収。底本は Frege (1990)。
- 1893. *Grundgesetze der Arithmetik: begriffsschriftlich abgeleitet*. Jena. Band I. Wieder in Frege (1962). 邦訳：『算術の基本法則』第I巻」野本和幸、横田榮一（訳）。フレーゲ（2000, 3–241）所収。底本は Frege (1962)。
- 1897. “Logik.” in *Nachgelassene Schriften*, hrsg. Hans Hermes, Friedlich Kambartel, und Friedlich Kaulbach, 137–62. 2. Aufl. Hamburg: Felix Meiner. 邦訳：「論理学 [II]」関口浩喜・大辻政晴（訳）。フレーゲ（1999, 115–55）所収。
- 1918a. “Der Gedanke. Eine Logische Untersuchung.” *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus*, 1: 58–77. Wieder als “Logische Untersuchungen: Erster Teil: Der Gedanke” in Frege (1990, 342–62). 邦訳：「思想：論理探求 [I]」野本和幸（訳）フレーゲ（1999, 203–35）所収。底本は Frege (1990)。
- 1918b. “Verneinung. Eine logische Untersuchung.” *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus*, 1: 143–57. Wieder als “Logische Untersuchungen: Zweiter Teil: Die Verneinung” in Frege (1990, 362–78). 邦訳：「否定：論理探究 [II]」野本和幸（訳）。フレーゲ（1999, 237–62）所収。底本は Frege (1990)。
- 1962. *Grundgesetze der Arithmetik: begriffsschriftlich abgeleitet*. Zweite unveränderte Auflage. Unveränderter reprografischer Nachdruck der Auflage Jena 1893. Hildesheim: Georg Olms.
- 1990. *Kleine Schriften*, hrsg. Ignacio Angelelli. 2. Auflage. Hildesheim: Georg Olms. 1. Auflage: 1967.
- フレーゲ, G. 1999. 『フレーゲ著作集4：哲学論集』, 黒田亘、野本和幸（編）。勁草書房。
- 2000. 『フレーゲ著作集3：算術の基本法則』, 野本和幸（編）。勁草書房。
- 飯田隆. 1987. 『言語哲学大全I：論理と言語』, 勁草書房。
- Kripke, Saul A. 1979. “A Puzzle about Belief.” in *Meaning and Use*, ed. A. Margalit. Dordrecht: Reidel: 239–83. Reprint in *Propositions and Attitudes*, ed. Nathan Salmon and Scott

- Soamaes. Oxford: Oxford University Press. 1988.
- McKay, Thomas and Michael Nelson. 2006. “Propositional Attitude Reports.” in *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, ed. Edward N. Zalta. URL = <http://plato.stanford.edu/archives/win2006/entries/prop-attitude-reports/> (accessed August 19, 2007).
- 野尻抱影. 1973. 『日本星名辞典』, 東京堂書店.
- 野本和幸. 1997. 『意味と世界：言語哲学論考』, 法政大学出版局.
- Salmon, Nathan. 1986. *Frege’s Puzzle*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 1990. “A Millian Heir Rejects the Wages of Sinn.” in *Propositional Attitudes: The Role of Content in Logic, Language, and Mind*, ed. C. Anthony Anderson and Joseph Owens. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.
- Schiffer, Steven. 2003. *The Things We Mean*. Oxford: Clarendon Press.
- 副島猛. 1994. 「直接指示説の 1 つの帰結：信念文におけるクリプキのパズルについて」. 『哲学論叢』第 21 号: 97-107.
- Taschek, William W. 1992. “Frege’s Puzzle, Sense, and Information Content.” *Mind*, 101 (404): 767-91. Reprint in vol. 4 of *Gottlob Frege: Critical Assessments of Leading Philosophers*, ed. Michael Beaney, Erich H. Heck, 217-44. London: Routledge, 2005.